

令和 4 年度 hug くむ保育園大岩評価書

I 経営の重点に関わる事 評価段階 (A : 大変良い B : まあまあ良い C : あまり良くない D : 全然良くない)

1. 園教育 (卒園目標) : 社会に出ていく為の基礎ができた子 保育目標 : 「内面的安定」「自立心」「自律心」 育成目標 : 「自分の力で気づける子」「自分の考えが持てる子」「行動を繰り返せる子」			
重点目標	評価指標	評価	自己評価
社会に出ていく為の 基礎ができた子	特定他者との安定した愛着の形成がなされ、内面的安定が図られるよう向き合っている。	午前と午後での保育者の入れ替わりが多い中ではあったが、どれだけ信頼関係を築けるか意識をして保育することができた。また、入園して不安を感じている子どもに対して、少しでも早く安心して過ごせるように受容しながら保育ができた。	A
	人や物に関心を示し (気づき) 探索活動の範囲を広げられるよう向き合っている。	子どもたちの自分で“発見する力”“成長する力”を信じて見守ること、子どもの気持ちに十分に共感していくことで、自分で世界を広げる楽しさや安心して探索活動の範囲を広げられるように関わることができた。また、給食やおやつ食材の盛り付け方や形を工夫して、子どもたちが食材に関心を示せるように工夫することができた。	A
	探索活動の中での不安・怖れ、あるいは喜び楽しさを受け止め、内面の安定を図れるよう向き合っている。	子ども 1 人ひとりの特性を理解して、予想を立てながら見守り、表情から読み取り代弁することができた。また、食事に関しては、苦手な物が食べられた際、保育者と調理員が一体となり喜ぶことで、より子どもたちの達成感につながったと感じる。職員 1 人ひとりが子どもたちを“待つ”ことを大切にしながら、不安を感じている子どもに対し配慮ができるよう、保育者間で連携して関わるとより良い保育につながる。	B
	「～したい」という、自らの考えを持てるよう子どもに向き合い、また子どもの考えをくみ取れるようにしている。(行動しやすいよう促している)	子どもたちの「～したい」という想いをできるだけ叶えられるように関わると共に、子どもたちが「したい」と思って行動することが成長につながるチャンスだと捉え、歳児に合わせて提供の仕方や遊びの内容等に配慮して関わるようにした。一方で、子どもたちに誘導的な声掛けをしてしまう場面もあり、子どもの想いや考えを聴き、臨機応変に対応することで、よりくみ取りやすくなる。	B

	<p>行動によって生じた結果に対し、自己肯定感（自己有能感）を持つ事ができるよう向き合っている。</p>	<p>できたことは存分に一緒に喜んだり、小さなことでも大きく褒めることを意識したり、できなかったことに対しては、次にどうするかを一緒に考え、“できなかった”で終わるのではなく、次への意欲、自信に変える関わりができた。できたことを褒める際、具体的に褒めたり、調理員も巻き込んで職員全員で子どもと一緒に喜んだりすることで、より自己肯定感をもつことへつながると良い。</p>	B
	<p>お友だちの気持ちに気づけたり、次の行動を見通すことができる促しをしている。</p>	<p>年齢や発達に合わせた援助ができた。まだ難しい0歳児に関しては、気づけるような声掛けをし、1歳児は一緒に知っていくことから行い、2歳児に近づくにつれて少しずつ自分で気づく、お友だちと関わることで気づく姿を引き出せるよう見守る援助に変えている。それを職員全員が同じ想いや関わり方で援助できるよう学んでいけると良い。また、見通しをもつという点で、給食の際、ごはん⇒汁物⇒果物と食べる順番にカウンターに並べたり、給食前にカウンター上へ果物を置いたりして、保育者だけでなく調理員なりに工夫する姿があり良かった。</p>	B

2. 保育方針

評価指標	評価	自己評価
<p>根拠に基づく保育を実践します。</p>	<p>自分で学んだり、研修で学んだり、年々知識は増えている。その根拠を知るだけでなく、自分がしっかりと納得して自信をもって保育することが“実践できる”と言えるのではないかと考えるため、小さなことにも意味や根拠をもって行っていきたい。それを職員全体で共有し、同じ想いや関わりで保育ができると良い。</p>	B
<p>子ども自身の発達状況や個性を尊重します。</p>	<p>発達状況と個性を掛け合わせると援助方法は何通りにもなるため、今までのやり方や決まりに捉われず、月齢だけを見るのではなく、どのような方法で援助することでその先の成長を促せるか試行錯誤していけると良い。</p>	B
<p>子どもの目線・気持ちに立って子どもの行動を考えます。</p>	<p>子どもたちの行動に対して、保育者なりに予想したり、確認したりして理解できるようにしている。また、どのような援助や関わりをすることが子どもによって良いのか、その先の子どもの行動も考えるようにしている。保育者の関わりが子どもに適切であったかどうか保育者間で確認し合ったり、気持ちに余裕をもって子どもに関わったりすることができるよう、保育者間の連携をさらに深めていけると良い。</p>	B
<p>子どもの話しや想いを聴いた上で、伝え導いていきます。</p>	<p>子どもの話を傾聴すること、共感すること、想いを話してくれるように関わること、信頼関係を築くことを意識して子どもに向き合うことができた。大人の考えだけで決めつけるのではなく、子どもと一緒に考えることをより意識できると良い。</p>	B

「いいところ見つけ」を心がけます。	保育者それぞれが、課題ではなく子どもの「いいところ」に目を向けることができた。それを職員同士で共有することでどのような発見をしたのかお互いを知ることができ、「いいところ見つけ」の意識がより高まる。	B
やり方を教えるだけでなく、「やってみたい」「学びたい」という意欲も育みます。	子どもたちが自分から意欲的に取り組めるように、活動の導入からまとめまでの流れを意識し、まずは保育者自身が「楽しむ」姿を見せることで、子どもたちの意欲を育むことができた。	A

II 施設機能に関わる事

大項目	中項目	評価指標	評価	自己評価
小規模保育施設における保育	発達の連続性を考慮した保育	0歳から3歳までの発達を理解し、子ども発達や実態に合わせて遊びの充実をしている。	今年度、各歳児に担任をつけたことにより、歳児に合わせた活動内容で保育することができた一方、クラス単位での活動が多かった。異年齢で遊ぶことで見えてくる発達や促せる成長があるので、小規模保育の良さを活かしながら、保育者間で連携して活動内容を考えていけると良い。	C
	一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	園児一人一人の生活や経験、発達過程を理解し、安定した穏やかな気持ちで園生活ができるように子どもの想いに寄り添い関わっている。	日によったり、午前と午後であったり、保育に入る保育者が変わることが多い中でも、子どもたちとの信頼関係をどの職員も築けていた。しかし、入れ替わりによる職員間の連携不足があったり、子どもたちの気持ちの安定につながっていなかったりした。園生活だけでなく家庭での様子もしっかりと漏れなく伝達し、連携ができると良い。	C
	環境を通して行う保育	子どもの成長につながるよう考え、遊びの展開に応じて環境の再構成を工夫している。	遊びに飽きたり、発達に合っていなかったりすることにより起きるアクシデントが多かった。遊びの展開を予想し、準備していき、子どもの様子に合わせて援助や環境を変えていけると良い。	B
安全管理・指導	事故防止・防災	様々な状況を想定し、危機管理体制を職員全員で作成し、園児にも安全行動を身につける指導をしている。	子どもの行動を予想しながら保育をすることは大前提だが、保育者の危険予測に対するスキルの差が見られたことによる怪我が多かった。防災訓練だけが危機管理ではなく、普段の保育で起きるアクシデント・インシデントも“自分事”として捉え、職員1人ひとりがそれに向き合い、同じことを繰り返さないように考えていけると良い。	C

保健管理 ・指導	生命の保持	<ul style="list-style-type: none"> ・安定した生活リズム（睡眠・食事・排泄等）の管理を行っている ・「おいしく・たのしく・たべる」をテーマに、様々な形で食に関わる体験ができるよう工夫している。 	<p>保育に入る職員によって差が生じてしまうことが課題。毎日同じリズムで過ごすことの意味や大切さ、その方法を全職員で共通認識としてもつことが必要。また、何に重きを置くかという点で、保育者間でズレが生じていた。それらを共有するために会議等の場を有効活用できると良い。</p> <p>給食やおやつに関しては、調理員を中心に盛り付けや飾りの工夫をし、子どもたちが食材に興味をもてるようにすることができた。調理員だけでなく、保育でも食育に関して何ができるか考え、連携したり工夫したりできると良い。</p>	B
	健康教育の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・園児の健康状態の把握に努めている ・園児の発育・発達状況の把握に努めている。 ・園児に手洗い・うがい等の生活習慣を身につける指導をしている。 	<p>感染症が園内で拡大しなかったことは良かったが、消毒や手洗い・うがいの指導が十分であったとは言えないので、習慣化すること、家庭との連携ができると良かった。また、健康面での家庭との連携（早めの受診の呼びかけ等）もできるとより良い。</p>	C
特別支援教育	支援体制の構築	<ul style="list-style-type: none"> ・全職員が園児一人一人の子どもを理解し、子どもの関わりに対し共通認識を持ち援助をしている。 ・特別な支援が必要な園児に対応するため、発達障害や病気、その他の特別な支援について、様々な知識の研鑽に努めている。 	<p>職員によって子どもの反応が変わることは、全職員が共通認識をもっていなかったり、援助が職員によって違ったりするためである。会議等を活用し、担任としての想いを発信できた職員もいれば、経験や意識の差による認識の違いがある職員もいた。保育者1人ひとりが学ぶ姿勢がもてるとより良い保育につながる。</p>	C
組織運営	組織体制の充実	<p>園運営（行事・保育・保護者対応など）について職員間で連携を取り合い、保育を進めている。</p>	<p>子どもや保護者への対応等、不明なことがあればすぐに相談し、連携して対応できた職員もいれば、行事・保育の準備不足、保護者対応への適切な報連相ができていなかった職員もおり、意識の差があった。伝達用のバインダーを設けたので、それを活用しながら意識の差をなくし、漏れなく伝達することで連携できると良い。</p>	B

研修	研修体制の充実	保育理念・目標・方針を実践に活かせる研修ができている。また実践に活かせる具体的な手立てや教材研究を行っている。	今年度も新型コロナウイルス感染症の影響で外部研修を受講する機会が少なく、受講できたのも数名だった。内部研修では、事例検討や法人代表による講義等を行い、スキルアップに努めた。学んだことを園の理念・目標・方針に落とし込むことはもちろん、それらを正しく理解し実践できると良い。	B
教育・保育環境の整備	教育・保育環境の充実	子どもが「楽しい」「またやりたい」と感じ、保育者自身も目的を持った環境や教材の工夫をしている	子どもが「楽しい」と思うために、まずは保育者自身が「楽しい」と思って活動を組み立てることを意識した。さらに、その活動に至るまでに1日の流れやその日を迎えるまでの日々の流れを考えることで、子どもたちの期待感や満足感、充実感につなげられると良い。	B
家庭との連携	家庭環境への支援機能の充実	保護者からの意見や要望、相談事を早目に解決できるように、保護者と職員が話し合いの場所をつくり、園からのおたよりを発行している。	保護者様からのご意見や相談事には時間をとり、迅速に対応することができた。また、必要に応じておたよりやメールの配信を行い、情報共有をすることができた。	A
連携園との連携	連携園との連携の推進	連携園に親しみを持って交流する機会を作っている。	新型コロナウイルスの影響はあったが、昨年度よりも直接的な交流をする機会をつくることができた。特に、今年度は連携園への入園希望者が数名いたにも関わらず、連携園との交流や進級へ向けての取り掛かりが遅かったように感じる。進級を見通して計画的にできるようにしたい。	C
地域との連携	信頼される園づくりの推進	園外保育や地域の多施設と交流し、近隣住民との触れ合いに努めている。	昨年度に引き続き園開放を実施したが、年間を通して、多くの方にご参加いただき、入園を決めてくださった方やリピートしてくださる方がおり良かった。また、コロナ禍においてもご近所の施設へお邪魔し、できる範囲で交流させていただくこともできた。	A

Ⅲ 園としての保育の総括

今年度、新体制となったことにより、今までできていたことができなかつたり、連携不足や経験・意識の差が生じたりしたが、職員全員が共通認識をもち、同じ想いで保育をすることをより意識して取り組んだ。昨年度課題に挙げた、連携の輪に入ってくるできない職員をどのように巻き込むかという点に関しては、職員同士で積極的にコミュニケーションを取り合う姿が見られたことが良かった。まだ認識に差があるが、その都度話し合いの場を設け、想いを共有し合ったり、時には指導したりしながら、どのように“職員全員が同じ想いで保育をする”ことができるかを引き続き考えていきたい。

また、今年度は内部研修の中の事例検討において、「フィンランド式キッズスキルの実践」をテーマとし、実際にフィンランド式キッズスキルを保育の場で実践することを目標とした。また、指導する側も実践する側も試行錯誤の状況だが、これができるようになることより同じ想いで保育をすることができると思うので、引き続き学びを深められるように実践していきたい。

Ⅳ 園としての経営の総括

今年度、0歳児クラスが年度の後半まで空きが多い状況が続いた。hugくむ保育園大岩を知っていただき、お子様をお預けいただける園にしていくために、SNS等を活用したり、地域に出向いて行ったりと、工夫しながら園児獲得に努めた。また、昨年度に引き続き園開放を実施することで、入園を決めてくださる方やリピートしてくださる方がいたことは、成果があったと評価できる。

また、今年度は他園による虐待事件や園バスへの置き去り事故のニュース等を受け、その一因とも考えられる職場環境に対し、今一度自らの保育を振り返り、お互いに話し合う機会を多く設けた。その中でも、子どもたちの「いいところ見つけ」をすることはもちろん、職員がお互いの「いいところ見つけ」をすることで、相手の得意なこと・苦手なことを知り、お互いにカバーし合える雰囲気づくりをした。それにより、今まで以上にコミュニケーションをとりやすい職場環境になったのではないかと考える。引き続き、より良い職場にしていくための対策を考えていきたい。